

# 旅人と門

作 山本夕カ

## 登場人物

桜井 哲

未知子

アインシュタイン

フロイト

マルクス

ダーウイン

プラトン

父

母

母の膝の上で眠る少年、桜井哲、五歳。母は、息子に昔話を聞かせている。

母 昔々のお話さ。この世界には、今の人間に及びもつかない、不思議なもので溢れていた。三つ首の竜に、瑠璃色の蝶、獅子の頭に山羊の胴と、毒蛇の尾つぼを併せ持った恐ろしい怪物。そんなもので溢れていた。

哲 嘘だい。

母 嘘じゃないさ。

哲 世界は怪物達で溢れていたのか？

母 そう、昔はね。

哲 昔は？

母 その昔、人は説明のつかない出来事を、すべて怪物達のせいにしていたの。

哲 例えば？

母 この世界そのものがそうさ。昔、世界は三匹の巨大な象の怪物に支えられていたの。

哲 象の怪物？

母 それは三兄弟で、名前をむかし、いま、向こうと言った。

哲 昔、今、向こう。

母 その昔、古代を旅する、一人の旅人がいた。彼は向こうの象が言うがまま、西へ西へと旅していった。

哲 なぜ？

母 安らかに眠れる地を探していたの。うつそうした森や、夜なんかは怪物達の天国さ。旅人はおちおち寝られやしない。だから、西へ西へと旅をした。

西の国には、化け物の嫌がる光がある。

哲 どんな光？

母 明らかという光さ。そいつは火を見るより明らか。煌々と、この世の未知を照らし出す。そこでは化け物達が鳴りを潜め、すべてに目が行き届く。果たして彼は西の国たどり着いた。そこでは四方が、マルクス、フロイト、ダーウィン、アインシュタインと呼ばれていた。

哲 なんだか、ややこしい名前だな。  
母 それはこの国に潜む、四匹の化け物を明らかにした、英雄の名前。  
哲 どんな化け物？  
母 金に心、命に時間という化け物さ。  
哲 聞いたことある名前だな。  
母 西の国は人間の楽園だった。

酔っぱらった父が出てくる。

父 楽園なんなもんか。  
母 お父さん。  
父 いいか、哲、西の国は楽園なんかじゃないぞ、墓場だ。  
哲 墓場？  
母 出鱈目言って。  
父 ああ、そうだ。さらに西の国には河童が住んでいる。  
哲 河童？  
母 お父さん。  
哲 じゃあ、化け物を明らかにしたのも、化け物なの？  
父 そうとも言える。河童達は、化け物からその身を守るため、四方をぐるりと壁で囲んだ。  
哲 それじゃあ、街から出ることができないじゃないか。  
父 そうだ。旅人もそれを思った。入ったはいいが出ることはできない。  
哲 変な話。  
父 変な話だろう。  
母 お父さん。  
父 河童達は心配性で、ぐるりと囲んだ壁にさらに煉瓦を置いていった。するとどうだ。河童の国は狭くて息苦しいものになってしまった。  
哲 じゃあ、積むのをやめればいい。  
父 そうはいかない、既に壁はたわんで軋んで、誰か一人でも手を止めたら、とたんに崩れ落ちてしまう。それに河童にも生活があっただな、煉瓦詰みをやめたら、家のローンも返せないし、食うにも困る。  
母 やめて下さい、そんな話。

父 第一、河童はずっと歩いていなきや不安なんだ。

哲 マグロと同じだ。

父 旅人は思った。

「絶望の城を組み上げる、その手を止める声がある。

欲望の殻を積み上げる、その手を止める声がある。

この世には、絶えて久しい子守唄。後生までへと鳴り響く。

地を這う者、しばし憩えよ。

睦び合え、枯れた心を暖めろ。

そんな、永久に暇を告げる、声がある。」

哲 それで？

父 え？

哲 それで、どうしたんだい？

父 どうもしないさ。思ったただけだ。

母 お父さんが出任せ言うから、本気にしちゃったじゃないですか。

哲 そんな話があるもんか。

父 大丈夫、本気にしてない。

哲 お話はすべて、めでたしめでたしで終わるんだから。

母 ほら。ちゃんとお終いまで話して。

父 弱ったなあ。

哲 それで、旅人はどうしたんだい？

父 どうしたと思う？

母 子供に聞く人がありますか。

哲 え？

父 どうしたと思う？

哲 ……

父 わからないだろう。旅人もわからなかった。だから。

哲 だから？

父 考え続け、その声を探し続けた。これは、めでたしめでたしで終わらぬ

お話。お前がその声を見つけておやり。

哲 僕が。

母 そうよ。まだ、五歳なんですもの。

父 なんだってできるさ。

【2】

幼なじみの未知子ちゃんが、ままごとで手料理を作っている。

未知子 トントントン、トントントン。それで？

哲 それで？

未知子 それがあなたの夢なの？

哲 そうさ、素敵だろう。

未知子 わからないわ。

哲 何が。

未知子 何がって、全て。そもそも旅人ってどういうお仕事？

哲 仕事じゃないよ、生き様さ。

未知子 (小馬鹿にして)生き様。

哲 おう、なんだ。

未知子 はい、できました。

二人ちやぶ台を挟む様に。

未知子 どうぞ、召し上がれ。

哲 今日のご飯はなんですか？

未知子 (差しながら)ケルベロスの甘酢あん掛け、ペガサスとドラゴンフルー  
ツの筑前煮、あとこれはマンドラゴラのおひたし。

哲 なんだってそんなものばかり。

未知子 酷い。一生懸命作ったのに。

哲 ごめんごめん、違うんだよ。

未知子 (ケロツと)はい、召し上がれ。

哲 ……いただきます。

哲、おそろおそろその中の一つを手にとり、食べる。

未知子 どう？おいしい？

哲 うん、おいしいおいしい。

未知子 どうおいしい？

哲 どう？

未知子 お料理なのよ、味があるわ。

哲 だってこれは、ままごとだよ

未知子 ……ひどい、二人の生活をままごとと呼ばわり。

哲 ごめん、でも本当のことを。

未知子 本当なんて、退屈だわ。発想力が貧困よ。私、帰る。

哲 (引き止め)ごめんごめん。今度はちゃんと味わって食べるよ。

未知子 さあ想像力の舌を伸ばして。頭で食わず、心でお食べ。どんな味がする？

哲 (もう一口食べて)新婚の味。

未知子 ほろ辛いマリッジブルー？

哲 いや、甘酸っぱい初夏の味。

未知子 二人が愛を誓った、あの夏ね。

二人は、空想の遊びにふけりだす。

哲 七月の海浜公園、耳を澄ました潮騒の音。

未知子 他には？

哲 浜辺をかける小麦色の少年達が持っているのはメロンソーダ、ブルーハワイのかき氷。

未知子 ねえ、あそこに登ってみない？

哲 高台に登ると君は、すっかり全てを脱ぎさった。

未知子 この水平線の向こうには何があるの？

哲 きっと、向こうに、新しい世界があるんだ。古代は象が世界を持っていて、その先に行けば真つ逆さまに落ちていった。それと同じ様に、ぼくがこのわたのはらにこぎいでたその向こうに、新しい世界があるんだ。きっと、旅人もそう思った。

未知子 またあなたの夢の話？

哲 ごめんよ。でも思ったんだ。さぞや堆く積まれた壁から見渡す向こうには、果てしない世界が広がっているだろうと。そう思うと、海のような気がして。気がして来たら、こぎいださずにはいられなくなった。

未知子 私は夢に待ちぼうけ。

哲　ごめん。でも、待っていておくれ。僕のふるさとの目印に。

未知子　じゃあ、私はあなたに歌を歌ってあげる。

哲　歌？

未知子　きつと、あなたは船の上で孤独だわ。それに鮫や海鳥が、あなたが餌になる時を待っているから、心の休まる暇がない。だから私は、時折ふるさとの歌を歌う。その歌に乗せて。あなたに安らかな眠りを届けるの。

哲　セイレーンだね。

未知子　ええ、旅人の恋人は、歌歌いのセイレーン、神話の怪物。素敵ですよ？

哲　素敵だ。これが、想像の味。

未知子　そのまた遠くの夢の味。

哲　君の作った空想の手料理は、こんな思い出を秘めていたんだね。

未知子　だからままごとなんて言わないで、本当なんて、美味しいだけでちつとも退屈。

### 【3】

その二人の空想を盗み見る、三匹の河童。

河童1(アインシュタイン)　聞いたか。

河童2(マルクス)　聞いたぞ。

河童3(ダーウイン)　確かに聞いた。

アイン　すぐにこの夢を掘り返せ！

マルクス　待ってください。

アイン　なんだ。

マルクス　まずは、教授に報告しましょう。

ダーウイン　これは、俺たちが見つけた夢だ。

マルクス　私利私欲に溺れるな。富は全員に分配される。

アイン　マルクスの言うことも一理ある。

ダーウイン　ですが。

アイン　なんだダーウイン。

ダーウイン　子供の進化の早さを鑑みると、そう悠長なことも。

マルクス　確かに。明日にだって、サンタクロースは父親だって気付くかもしれない。

ダーウィン　公務員になりたがるかもしれない。

アイン　しかし、三十になってもビツクになるぜと、夢を追う奴がいる。

マルクス　そんな夢は卑屈です。

ダーウィン　燃えかす同然。

マルクス　アインシユタイン隊長。早くしないと子供が気付きます。

アイン　うーん。では、相対的に結論を出そう。(ダーウィンを差し)急ぐ、(マルクスを差し)掘り起こす、(アイン)教授に報告。以上の事から、急いで教授に報告し、この夢を掘り起こす事にする。

マルクス　相対的だ。

ダーウィン　意義なし。

アイン　では、帰るぞ

マルクス　(落ち込み)帰るのか。

ダーウィン　(落ち込み)あそこを通って帰るのか。

アイン　カエルカエル言うな。縁起でもない。

ダーウィン　しかし、あそこを通ると、なんだか退化している気分になる。

アイン　なんだと。俺の相対性理論を駆使したあの転移装置を。

マルクス　でも、あれは……便所じゃないですか。

ダーウィン　どうして便所なんですか。

アイン　どうしてもだ。我々の国とヒトの国。唯一通じているのは、便所なのだ。それはお前らも知っているだろう。

マルクス　まて、子供が起きるぞ。

別の部屋にて

哲　ちよつと、トイレ。

未知子　お花を摘むのね？

哲　お花なんて摘まないよ。おしっこさ。

河童達、急いで便所に駆け込んでいく。



アイン　早くしろ。  
マルクス　うえ、臭い。  
ダーウイン　河童の便所とは大違いだ。  
アイン　四の五の言うな。見つかるぞ。

河童達、三匹続いて便所にぎぶんと入っていく。  
哲、そのすぐ後に便所のドアを開ける。ガチャ。水浸しの便所。

哲　お母さん、トイレがびちゃびちゃ！

【4】

河童の国。動き回りながら河童三匹を待つ、河童4、フロイト。

アイン　教授！ただ今戻りました。

フロイト　遅い！

アイン　申し訳ありません。

フロイト　帰還が遅れた理由は。

アイン　便所が、詰まりました。

マルクス　なので帰るのが少々……

ダーウイン　おい。

フロイト　マルクス、何と言った。

マルクス　カエルのが少々。

フロイト、マルクスを殴ろうとする。マルクス身を固める。しかし、殴らない。

フロイト　殴らない。暴力は行使しない。だがマルクス。

マルクス　はい。

フロイト　軽々にカエルなどとは言わない様に。

マルクス　申し訳ありません。

フロイト　どうしても言いたい時は、断ってからにしてください。ダーウイン。